



負債の循環的再生産
——マカオのカジノにおける「扒仔」の事例から——

劉 振 業*

Circulative Reproduction of Debt:
The Case of “Paichais” in Macau Casinos

LIU Zhenye*

Abstract

In this case study, I analyze the “circulative reproduction” of paichais and debt in Macau’s casinos. Paichais, are lower-level criminal loan sharks who negotiate illegal debt with gamblers in Macau’s casinos. They are typically pathological gamblers themselves, have a unique understanding of other pathological gamblers’ mindsets, and approach other their targets with fraudulent identities. By manipulating their targets into taking on large debts, they create new paichais.

Due to a paucity of literature, this study builds upon the limited existing research on paichais, focusing on the concept of catachresis in the definition of “paichai”. It discusses the criminal activities of paichais and the criminal groups behind them, not from an economic-anthropological perspective, but instead considering them as economic activities. It not only explores the social and cultural context of Macau as it relates to the criminal activities of paichais, but also provides insight into the life of paichais in Macau society.

Examining of the case of the paichais helps understand the institutional reasons (one country, two systems, and invitation-only VIP rooms) and cultural context (popularity of table games and overconfidence in gambler’s ability) for the generation of criminal behaviour, and the casino’s “circulative reproduction” of debt, wherein the paichais

* 京都大学人間・環境学研究科 ; Graduate School of Human and Environmental Studies, Kyoto University, Yoshida-nihonmatsu-cho, Sakyo-ku, Kyoto, 606-8501, karuma917@gmail.com

exploit the temporary intimacy that they tend to generate with gamblers. I also identify the strategies significant for survival as a criminal in society.

The spiral of “circulative reproduction” is evident, as paichais, who are also pathological gamblers, manipulate other pathological gamblers using various techniques, resulting in the creation of new paichais and the continuous spiral of paichais joining and leaving criminal groups owing to their addiction to gambling. The spiral of “circulative reproduction” is particularly prevalent among paichais, who play with the uncertainty of gambling and life, resulting in the sustained creation of paichais criminals as long as casinos remain in operation.

キーワード：マカオ、カジノ、扒仔、犯罪、ギャンブル

Keywords: Macau, Casino, Paichai, Crime, Gamble

I 扒仔の定義と先行研究の不足

1 扒仔の定義

扒仔（広東語発音¹⁾：パーザイ）とは何者か、マカオのニュースでよく出てくるこの言葉が指し示す対象を、マカオのカジノに詳しくない中国語話者に聞いても、おそらく答えられる人は極めて少ないだろう。扒仔に関する研究は中国語圏においてはほぼ見当たらず、英語では Paichai と訳された上で、以下のような定義が提示されている。

マカオにおいて中国人の病的ギャンブラー (pathological gamblers) は扒仔 (Paichai) と呼ばれ、ギャンブラーの中でも独特の集団を成している。この人たちは毎日、長期間にわたってカジノでギャンブルに浸かっている。彼らはコンプリメンタリー²⁾の食事で生活したり、敷地内のソファでうたた寝をしたりすることが多く、カジノの「住人 (resident)」とも言える存在である [Chan and Ohtsuka 2013: 3]。

しかし、この定義はマカオのニュースのみならず、広東語話者のギャンブラーにおける扒仔に対する一般認識との間で大きな相違が生じている。上記の研究 [Chan and Ohtsuka

1) マカオでは標準中国語ではなく広東語が多用されているため、本稿においてマカオの現地語を表記する際には広東語の発音を用いる。

2) コンプリメンタリー (complimentary) とは、カジノ側が提供する「無料 (もしくは割引) のもてなし」を意味する。

2013] は「扒仔＝病的ギャンブラー」という前提で分析が進められ、扒仔の臨床的・社会的形成について心理学・精神病理学から考察が行われた。その中には、一部の扒仔は高利貸しのミドルマンになったという記述がある [Chan and Ohtsuka 2013: 7-8] もの、扒仔を病的ギャンブラーの完全同義語として扱って論じたものである。しかし実際は、病的ギャンブラーすべてを扒仔と呼ぶわけではなく、ギャンブラーに高利貸しの交渉を持ちかける人が扒仔と呼ばれている。確かに、扒仔の多くが病的ギャンブラーであることが多いものの、扒仔はあくまで病的ギャンブラーの部分集合に過ぎず、「扒仔＝病的ギャンブラー」と同義に扱うのは不適切であると筆者は考えており、扒仔の再定義および再考察が必要であると思われる。

扒仔とは、概ね犯罪集団の下っ端の人を指すことが多いが、状況によって以下の二つの意味がある。(1) チップハスラー：ギャンブラーが気づかないうちにチップを盗む者である。扒仔の語源と言われる「扒手(スリ)」のカジノ版である。(2) ローンネゴシエーター：ギャンブラーに高利貸しの交渉を持ちかける者であり、現在の扒仔たちの「本業」とされている。本稿では、扒仔の定義をギャンブラー間の一般認識とマカオに見られるニュースにおける意味である「ローンネゴシエーター」に限定する。また、扒仔は男性を指す言葉であり、本稿では総称として扒仔を用いるが、女性の事例を述べる際に「扒女」も使用する。

だが、扒仔は定義を明確にしても該当する先行研究がほぼ見当たらないため、依然としてベールに包まれた存在である。以下、犯罪者である扒仔を考察する際に手がかりとなる犯罪人類学を概観した上で、マカオの扒仔に対して人類学においてどのようなアプローチが可能か提示して本稿の視座を示したい。

2 犯罪人類学

犯罪人類学 (anthropology of crime) は欧米では一定の研究蓄積が見られるが、日本ではまだ聞き慣れない分野である³⁾。しかし、犯罪人類学の父と呼ばれるチェーザレ・ロンブローゾ (Cesare Lombroso) の生来性犯罪者説 (theory of 'born criminal') は有名であろう。19世紀末、ロンブローゾは社会進化論のヘゲモニーの影響を受け、人間の身体的・精神的特徴と犯罪との相関性を検証した結果、犯罪者には一定の遺伝的要素の影響が認められると主張した [Jones 1986; Jensen 2001; Ziliotto 2019]。生来性犯罪者説に対して後世では多くの批判的意見が続出し、ここでは詳述しないが、一つだけ注意しておきたい点として、生来性犯罪者説における「犯罪者」は法律上の罪を犯す法学・社会学の概念ではなく、生物学の概念である。この意味では、ロンブローゾが称する犯罪人類学は anthropological criminology

3) 人類学者が行う先住民に対する一部の調査の仕方が法体系や倫理面で問題があるか否かという、植民地主義的調査から脱する人類学の「犯罪性」に関する議論は本稿の問いと異なるため、ここでは深入りしない。

または *criminal anthropology* の方が適切である。

現在、犯罪人類学は主に以下のような二つの意味が含まれる。(1) 犯罪化の人類学 (*anthropology of criminalization*) : 特定の集団と実践がどのように国家の権威、メディアと市民の言説によって犯罪であると定義されるかについての考察, (2) 組織化される違法と略奪行為の民族誌的研究 [Schneider and Schneider 2008: 352]。前者はまた二段階に分けることができ、20世紀半ばまで人類学の調査対象は概ね小規模な社会だったため、現在「犯罪」と見なされる規範から逸脱した行為をした人は、法律ではなく道徳の非難また呪術による処罰を受ける[e.g. Malinowski 1926]一方、20世紀半ば以降新自由主義と資本主義の拡張によって現代法の範囲が世界中に広がり、呪術に対する告発と犯罪化が爆発的に増加した [Comaroff and Comaroff 1999]。他に、植民地拡張時代における反抗運動を起こした人が国家によって犯罪者化される「犯罪／反抗」の両面性に関する考察 [Hobsbawm 1959; Guha 1983] や、現代青少年や黒人、貧困層に対する犯罪者構築 (*construction of criminality*) の人類学的調査なども見られる [Caldeira 2000; Low 2001]。後者は匪賊、強盗、密売者、ギャング、マフィアなどといった犯罪行為と組織に焦点を当てて論じるものが多い。これらの犯罪集団は、異なる社会と地域において異なる様相が見られるため、考察のアプローチもそれぞれである。例えば、匪賊と強盗は国家／社会の管理の周縁で誕生しやすいと論じられる一方 [Gallant 1999; Fleisher 2000]、(人身、麻薬、臓器などの) 密売者は異なる国家／社会間の境界を潜り抜けて巨額な利益を得る存在である [Scheper-Hughes 2000; McMurray 2003]。他に、ギャングにおける入会儀式や命令の強制執行の忠誠心に見られる団結力と帰属意識を強めるものに注目して、彼らは新自由主義再構築の犠牲者であるという考察も見られる [Venkatesh 1998; Vigil 2003]。

とりわけ、この中で最も組織化されているマフィアに関する研究の蓄積が多く見られ、ギャングと似たような入会儀式や帰属意識といった秘密結社の側面のみならず、中国の三合会⁴⁾、イタリアのマフィア、日本の山口組など通時的変化を持つ組織の歴史的な脈に注目する考察も見られる [e.g. Chu 2000; Paoli 2003; Kaplan and Dubro 2012]。他の犯罪集団と比べてマフィアに対する研究の特徴として、組織的犯罪が「ビジネス」と見なされる経済活動の一環であることに注目することが多い。

このように、犯罪人類学は犯罪化の人類学と犯罪集団の民族誌的研究に大きく二つに分かれる分野である。しかし、扒仔を犯罪集団(高利貸し組織／マフィア)に所属する高利貸しの交渉者として考察する場合、高利貸しという現代法体系において自明な犯罪行為は犯罪化されるまでもなく、また、扒仔の生と実践が犯罪集団の視点では記述しきれないため、この

4) 三合会 (*triad*) は、香港をはじめ、世界中の華人社会にまで影響力を持つ犯罪集団の総称である。マカオにおける三合会の支部は「14K」と呼ぶ。

二つのアプローチはそれほど有効ではないだろう。後述するように、扒仔の交渉実践は全て犯罪行為に該当するわけではなく、扒仔が所属する犯罪集団は高利貸しという「経済活動」をしているものの、入会儀式や強い帰属意識のような組織の文化的側面が顕著ではない。そもそも、人類学者にとって犯罪集団が容易に接触できる存在ではないと指摘されるように [Schneider and Schneider 2008: 363], 犯罪人類学の調査と考察には多大な根本的困難が立ち塞がっている。

そのため、扒仔を考察する際、既存の犯罪人類学のアプローチの有効性が欠如しており、それとは少し異なる視点で分析する必要があると思われる。本稿では、扒仔が所属する犯罪集団の文化的側面を記述する代わりに、扒仔自身の実践と生に焦点を当てて考察を行う。

3 犯罪記述の困難と本稿の目的

扒仔の実践と生にフォーカスを合わせる際に、所属する犯罪集団と犯罪行為の記述は避けられない。しかし、その記述には、対象接近の危険性や情報の秘匿性、記述の道徳性などが問われる困難が立ち現れてくる。以下は、一部の内容を先取りして紹介することになるが、本稿の記述における困難と課題を大まかに三つ挙げる。

一つ目は、前節の最後に紹介したように、人類学者にとって犯罪者が容易に接触できる存在ではなく、その接近の難しさである [Schneider and Schneider 2008: 363]。本稿で取り上げた扒仔はマカオのカジノの至る所で見かける存在だが、あくまで高利貸しの犯罪集団の下端にすぎない。扒仔の背後にある犯罪集団の幹部にあたる人物にまで近づくことは、人類学者にとって大きな危険性を伴うことである。

二つ目は、多くの調査内容が公開できないことである。日本の表社会において認知されている程度透明化されているとも言える暴走族やヤクザ、ヤンキーの人類学的考察 [e.g. 佐藤 1984; ラズ 1996; 齋藤ら 2014] でさえ、具体的な組織構造と犯罪活動の現場の記述を避けた。まして、扒仔という呼び方すら多くの中国語話者に知られていない本稿の調査対象に対して、扒仔の所属する犯罪集団に入って調査を行ったとしても、犯罪集団の内実と犯罪活動の過程（監禁など）を公表することは到底不可能である。

三つ目は、上記の制限を受けて調査を遂行しても、犯罪関連の事項に関する「記述の道徳性」が問われることである。この「記述の道徳性」はまた二つの意味を持っている。(1) 扒仔側の視点からギャンブラーを高利貸しまで誘導し監禁するといった具体的な事例を記述すると、筆者が扒仔と共に行動し犯罪行為を許容しているのかという「記述内容の道徳性」が問題視される。(2) 本稿では扒仔を犯罪者として記述したが、実際ギャンブラーに違法な高利貸しの借用書を作成させることに至らなかつたり、監禁行為に参加しない限り、扒仔は法的枠組みから見ればまだ「ただのギャンブラー」の状態にあるにすぎない。本稿のように厳密に言

えばまだ犯罪者ではない扒仔の生と語りを記述しながら、彼らを一種の犯罪者という前提で考察することは、一般人が人類学者の記述において犯罪者と仕立てられる「記述による犯罪化の道徳性」が問われるべきである。

とりわけ、犯罪活動の内容を記述すると犯罪行為の許容になる一方、犯罪活動の内容を記述せずに犯罪について考察を行うとインフォーマントが一般人という状態を強引に犯罪者と見なしてしまう。このように、同一の記述において二つの道徳性を同時に満たすことは極めて難しく、「記述の道徳性」における二つの意味が両立しにくいことが、本稿の記述における最大の難題である。潜在的犯罪者を調査対象として考察する際に、記述の限界はどこまであるのか、さらなる検討が必要であると思われる。

このような困難を受けて、本稿はマカオのカジノの特殊性で生まれる犯罪者である扒仔に対して、彼らの犯罪実践そのもののやり方を記述するだけでなく、扒仔の語りと合わせて扒仔の実相を解明する試みである。本稿の視点は、扒仔および背後の犯罪集団による犯罪行為を経済活動と見なして経済人類学のアプローチから論じるものではなく、犯罪行為そのものをマカオ社会において扒仔が生き抜く技法として扒仔の生を描くものである。

その上で、本稿の目的は、扒仔の事例を通してその実相を解明し、扒仔の実践を特定の社会における犯罪行為に対して犯罪人類学の視点から考察し、扒仔が不断に生成され続けるマカオの社会的・文化的文脈および扒仔自身がギャンブルと生の不確実性を楽しむ様子を明らかにすることである⁵⁾。

II 調査地概要

1 カジノシティであるマカオの犯罪発生状況

中国東南部に位置するマカオは「東洋のラスベガス」と呼ばれるほど、世界で有名なカジノシティである。中国で唯一カジノが合法化されている地域であるマカオは、2022年第一四半期時点で総面積が33平方キロメートルしかないにもかかわらず、営業中のカジノが42軒に達している [DICJ 2022; DSEC 2022]。

日本ではカジノ導入をめぐる議論がなされる際に、導入が懸念される理由に「治安の悪化」が挙げられる [古宮 2021]。しかしカジノシティのマカオでは、地元住民を対象とした窃盗

5) 本稿のデータは、筆者が2019年2月から2020年9月にかけてマカオのカジノで延べ1年7ヶ月間行ったフィールドワークにおいて収集した。調査には主に標準中国語と広東語を用いた。特に、新型コロナウイルス感染拡大前の2020年1月末までマカオのカジノでは大量の扒仔が見受けられたが、それ以降扒仔の姿はほとんど消えたため、本稿の民族誌的現在は主に2020年1月末までマカオのカジノの「通常状態」に準ずるものである。また、本稿で言及する通貨のレートは、1パタカ = 16.17円、1香港ドル = 16.61円、1元 = 19.30円（2023年2月時点）である。

や強盗、傷害事件のような犯罪は多発していない。マカオ市民にとって、カジノ産業の繁栄が自分の身の安全に悪影響を及ぼすことにはならず、日常生活を送る意味ではむしろ中国返還前より「治安が良い」と言われている。しかし同時に、マカオにおける犯罪の種類と件数から見れば、「治安が悪い」と捉えることも可能である。

中国返還前のマカオはSTDM社⁶⁾によるカジノ産業独占営業が行われ、マフィアが横行していた時代と言われている。初期の頃は、多くの観光客の行き来で巨大な利益を生んだ香港との海上運輸における、マフィアによるフェリーチケットの買い占めと転売といった問題が生じた。それに対して1972年、STDM社はマフィアのチケット転売がもたらす支障を解決するために、ギャンブラーの誘致とデッドチップ⁷⁾の販売に方針転換の案を持ち出し、マフィアと協議した。マフィアが多くの香港人資本家と富裕層をマカオまでギャンブラーとして誘致し、STDM社はこのような「金持ちギャンブラー」の需要を満たすために、1976年にマカオ初のVIPルームを開設した。

1990年代に入り、VIPルームの規模拡大に伴い、VIPルームの市場競争はマフィア間のテリトリー争いに転じた。その最高潮は、1997年に三合会傘下の「14K」と、マカオ現地のマフィアの「水房」の間で起きた、街頭における大きな衝突事件である [Lo and Kwok 2017: 592]。当時のマカオの街頭は窃盗や強盗、暴行・傷害事件が頻繁に発生し、中国返還を目前にするマカオ社会は治安の不穏さが問題視されていた。

中国返還後のマカオにおける犯罪には、殺人や放火のような「刑事犯罪」に対して、マカオの文脈で生まれる新種の「非刑事犯罪」がある。とりわけ、マカオ保安庁 (GSS) が毎年公表する犯罪の統計データにおいて、大陸人による「非刑事犯罪」は扒仔、違法両替、売春活動、不法就労とその他が挙げられる [GSS 2022]。これらの犯罪はいずれも、一国二制度⁸⁾の隙間で生まれた犯罪である。マカオのカジノ産業がまだ繁盛していた新型コロナウイルス感染拡大前の2018年と2019年に、逮捕された扒仔の数はそれぞれ1,339人と1,046人であり、売春活動⁹⁾で逮捕された人の数(1,147人と1,231人)と変わらないほど多いのである。しかし、新型コロナウイルス感染拡大後、カジノ産業が急激に衰退し、2020年と2021年に逮捕され

6) STDM社とは、1962年から2002年まで40年間マカオのカジノ産業を独占営業していたマカオ観光娯楽株式会社の略称であり、今日のマカオ社会およびカジノ業界の基盤を築き上げた会社である。

7) デッドチップ (dead chip, または nonnegotiable chip) とは、現金に換金不可のチップである。カジノフロアとVIPルームを問わずデッドチップを使う場合、勝った分が一般のチップで配当され、元金のデッドチップは手元に残るままである [Siu Lam 2013: 321]。

8) 一国二制度 (One Country, Two Systems) とは、中華人民共和国の政治制度において、香港とマカオを大陸領域から分離した特別行政区という領域に指定し、主権国家の枠組みの中において一定の自治や国際参加を可能とする政治システムのことである。

9) カジノシティであるマカオは性産業が発達しており、「情色之地 (エロスの地)」とも呼ばれている。マカオの性産業の概況は、筆者の別稿を参照されたい [劉 2021a: 10-11; 15-17]。

た扒仔の数はそれぞれ 37 人と 8 人まで激減した [GSS 2022]。

上記のように、マカオにおける非刑事犯罪の中で扒仔は決して珍しいわけではない。また、扒仔は観光客としてマカオに滞在することが多くて正確な数が掴めないだけでなく、摘発されても犯罪者として捕まることが比較的難しいため、実際マカオで暗躍している扒仔の数は数万人いるとも言われている。しかし、新型コロナウイルス感染拡大に伴う中国政府の厳しい感染防止対策の実施による、大陸人観光客の激減や扒仔の渡航の困難化といった理由で、扒仔はマカオに拠点を持つ売春婦と比べて急激に減少したように見受けられる。

2 扒仔の犯罪活動の制度的理由および文化的背景

次に、扒仔の犯罪活動の制度的理由および文化的背景について紹介する。まず、扒仔の高利貸しの誕生背景にあたるマカオのカジノの特徴について紹介する。主に、(1) 紹介制 VIP ルーム、(2) 賭け金の制限という二つの理由が挙げられる。

(1) マカオのカジノの VIP ルームは、会員カードで頻繁に遊んでポイントを貯めて昇格するというラスベガスで主流なやり方と異なり、紹介制が基本である¹⁰⁾。VIP ルームでギャンブルをするには、当ルーム専用のアカウントを開設する必要があるが、アカウントの開設資格として、フロアのホステス、ジャンケット¹¹⁾、扒仔のいずれかの紹介が必須である。専用アカウントは預金を入れる形式ではなく、事前の協議でギャンブラーの元金が決まる。専用アカウントを持った上で、VIP ルームからデッドチップをもらい、ギャンブルを始める。このように、紹介制であるマカオの VIP ルームにおいて、扒仔はギャンブラーを VIP ルームへ紹介するという役割を持っている¹²⁾。

(2) 扒仔はギャンブラーのマカオ滞在時の賭け金の制限を「解決」することができる。大陸人ギャンブラーは一国二制度の実施によって海外扱いされるマカオに訪れる際に、持ち込

10) 紙幅のため、マカオの VIP ルームの開設および経営方式は筆者の別稿を参照されたい [劉 2022: 163-165]。

11) ジャンケットとは VIP ルームへ富裕層の客を誘致し世話する、マカオにおいて政府公認の合法的な職業である。しかし実際、ジャンケットは公的に登録をせず活動する人が多いことに加え、マカオ政府が登録済みのジャンケットの数を公表していないことから、「不可視の存在」となっている [劉 2022]。

12) VIP ルームにギャンブラーを紹介するジャンケットと扒仔は、カジノを運営するゲーミング会社に管理されていないことが多い。ゲーミング会社と VIP ルーム経営者は契約を結んだ経営上の提携関係にあり、ゲーミング会社は VIP ルームの場所とゲーム進行に必要なもの（テーブルやディーラーを含む）を提供する代わりに、VIP ルーム経営者はゲーミング会社に収益の一部を渡す。

また、ジャンケットと扒仔は特定の VIP ルームに専属するわけではなく、状況に応じて複数の VIP ルームにギャンブラーを紹介する柔軟性を持っている。そのため、ジャンケットと扒仔は、ゲーミング会社にも VIP ルームにも管理されておらず、VIP ルームとの間に協力関係がある独立した存在である。

み可能な金額に制限がかかっている。出入境審査場¹³⁾の存在によってマカオに入関する人が持ち歩く現金は無申告の場合、最大12万パタカ¹⁴⁾までとマカオ税関に定められるが[MCS 2022]、中国大陸の住民は大陸から出関する際に最大2万人民币元までと大陸側に決められており、中国大陸の銀行口座からの引き落とし金額の上限額が一日1万人民币元とマカオ金融管理局によって設けられている[劉 2022: 175]。言い換えると、最大滞在期間1週間の大陸人ギャンブラーは、最大日数まで滞在しても合計9万人民币元までしか賭けられない。ギャンブラーは負けた分を取り返したいと思ったり、VIPルームで大金を賭けたりするといった理由で、さらなる賭け金を獲得するには非正規ルートに頼る必要がある。その手段とは、中国大陸の口座から不正の決済端末を持って不法な両替をする質屋と両替商の他に、扒仔による高利貸しもその一つである¹⁵⁾。

続いて、扒仔が高利貸しの交渉者として一般ギャンブラーに比較的簡単に近づける文化的背景について紹介する。扒仔の犯罪には二つの文化的文脈が背後に潜んでいる。一つ目は、マカオのカジノでは人間対機械であるマシンゲームではなく、テーブルゲームが圧倒的に人気をおさめ¹⁶⁾、ギャンブラー間の交流が比較的多く一時的な親密性が生成されやすい中、扒仔に一般ギャンブラーへの接近しやすい場が提供される。二つ目は、生活改善を目的とする大勝利への渴望と能力の過信という、中国人ギャンブラーに見られるギャンブルに対する思考のもとで一発逆転を狙う人が非常に多いため、高利貸しに手を出す傾向が強い¹⁷⁾。マカオのカジノに見られるこの二つの文化的文脈の中で、扒仔が一般ギャンブラーに高利貸しの交渉を持ちかける行為は悪目立ちすることなく、さらに交渉が成立しやすい環境が整っている。

13) 中国大陸とマカオの間で行き来する時に通る境界は、一国二制度により「国境」として見なされないため、「出入国」という言葉が使われない。公式では「出入境」、民間では「入関」「出関」「過関」と呼ばれるため、本稿では文脈に応じて「境」と「関」を使い分ける。

14) パタカはマカオの通貨であるが、現地の店舗ではパタカ、香港ドル、人民元の3種類が使用可能であり、レートを無視して1:1:1で流通している。

15) このマカオのカジノの二つの特徴のもとで、扒仔と非常に似ている実践を行う者として、ジャンケットが挙げられる。扒仔はジャンケットと同様にギャンブラーをVIPルームまで誘致して、誘致されたギャンブラーがそのVIPルームでのギャンブルから利益を得るため、マカオ保安庁の分類でさえ2017年まで扒仔が未登録のジャンケットと同一視されるくらい、両者は混同されやすい存在である[GSS 2022]。両者の最も大きな違いは、ジャンケットのアプローチ対象が富裕層の資本家や官僚といった金持ちギャンブラーに対して、扒仔のアプローチ対象はカジノフロアで賭ける一般ギャンブラーである。

16) マカオのカジノにおいてマシンゲームは不人気でテーブルゲームは人気である具体的な理由は、以下を参照されたい[Lam 2005; Schüll 2013]。

17) 大勝利への渴望と能力の過信という中国人ギャンブラーの特質については以下を参照されたい[Schüll 2013: 95; 劉 2021b]。

III 高利貸しの負債を負うまで

扒仔についての紹介に入る前に、本稿で扱うデータの真正性について少し説明する。本稿で提示する扒仔に関する内容は犯罪手法に当たるものが多いため、すべてのデータに出典を示すことが難しい窮状にあるが、主にマカオの新聞記事と複数の扒仔へのインタビュー、実際の参与観察という三つで構成され、筆者によって合成したものである。とりわけ、参与観察で記録した事例は犯罪現場を半ば描写することになってしまうため、本稿では扒仔の実践に当たる事例の紹介を避ける。データの真正性について、高利貸しの仕組み（III章）とギャンブラーへの接近方法（IV章）の、大きく2種類に分けて出所を明確にする。

高利貸しの仕組み（III章）では、主に澳門日報に公開されている新聞記事に基づいている。これらの新聞記事は警察側が公表する、扒仔が逮捕された後で自供した内容であり、特に利息の控除方法および控除率（表1）と債権回収における脅迫行為が明記されている、信憑性が確保できるものである。一方、目標接近・借金協議のようなディテールは扒仔へのインタビューと参与観察によるものである。

ギャンブラーへの接近方法（IV章）では、主に扒仔へのインタビューと参与観察で得た内容を合成したものである。とりわけ、扒仔のギャンブラーへの接近方法（IV章1節）は新聞記事に公開されることがほとんどないため、扒仔との関わりの中で筆者が抽出し記述したものである。

1 高利貸しの仕組み

「ローンネゴシエーター」である扒仔の活動内容は一言で総括すれば、高利貸しを通じて一般ギャンブラーを金持ちギャンブラーに「一時的に変身」させて、VIPルームでのギャンブル実践を通して巨額な借金を背負わせることである。扒仔の高利貸しは、直接一般ギャンブラーに大量の現金を渡したり、銀行口座に振り込んだりするといった方法ではない。彼らが貸しているのは、協定を結んだ指定のVIPルーム¹⁸⁾のデッドチップである。扒仔による高利貸しは高い利息が付随されているため、それを借りた一般ギャンブラーはすぐに破滅の局面に追い込まれる。

ここからは、扒仔による高利貸しの仕組みについて紹介する。扒仔とその高利貸しの組織から一般ギャンブラーがつくる借金は、「抽底息」と「抽成数」という二つの部分で構成される。(1) 抽底息（広東語発音:チャウダイスエ）とは、最初に借金の金額から一部を引いて「底

18) マカオのVIPルーム経営は違法組織（マフィアや高利貸しなど）との関係が深い [Lo and Kwok 2017]。扒仔がギャンブラーを誘導するVIPルームは違法の存在ではなく、マカオ政府およびゲーミング会社が公認し開設するものである。

の利息」として天引きする利息のことである。「底の利息」は高利貸しの組織によって5%から25%まで様々な利率が見られるが、一般的に10%であると言われている。例えば1000香港ドルを借りる場合、「底の利息」である100香港ドルが最初に控除され、一般ギャンブラーの「手取り」金額は900香港ドルしかない。このやり方は、カジノコンセッション開放¹⁹⁾(2002年)前に、マカオと香港における高利貸しの有名な比率である「九出十三帰」²⁰⁾から受け継いだとされている。カジノコンセッション開放後は、抽底息のみで貸す高利貸しがほぼ消えたと言われているが、稀に抽底息のみの高利貸しに関する報道が見られる[澳門日報 2021d]。

(2) 抽成数(広東語発音:チャウセンソウ)とは、一般ギャンブラーが借りた金で賭ける際に、ベットの結果に応じて一定の比率で控除する金のことである。抽成数のパターンは非常に多様であり、2019年から2021年4月末までの近年の新聞記事から表1のようにまとめること

表1 2019年から2021年4月末までの新聞記事に見られる抽成数のパターン²¹⁾
(カッコ内は2回以上の記事数)
出典: 澳門日報より筆者作成

ベットの結果	控除率
勝った時のみ控除する	20% (8) ^① , 15% (7) ^② , 10% ^③
バカラの点数と関係する	9点のみ 60% ^④ , 50% ^⑤ , 40% ^⑥
	8点のみ 50% (2) ^⑦
	8, 9点の場合 30% (4) ^⑧
	7, 8, 9点の場合 15% ^⑨ , 30% (2) ^⑩

①以下の記事を参照されたい[澳門日報 2019f; 2019g; 2019i; 2020a; 2020f; 2020j; 2020l; 2021e]。(以下の注は同様)

② [澳門日報 2019l; 2020c; 2020g; 2020h; 2020k; 2021a; 2021b]。

③ [澳門日報 2019e]。

④ [澳門日報 2019a]。

⑤ [澳門日報 2020p]。

⑥ [澳門日報 2019h]。

⑦ [澳門日報 2019d; 2020o]。

⑧ [澳門日報 2019b; 2020d; 2020i; 2020n]。

⑨ [澳門日報 2020m]。

⑩ [澳門日報 2019c; 2020e]。

19) カジノコンセッション (casino concession) とは、特定の地理的範囲と、カジノという事業範囲において、ゲーミング会社が政府と経営権契約を結ぶライセンスを指す。

20) 九出十三帰 (広東語発音: ガウチョッサウッサングォイ) とはもともと10香港ドルの借金を9香港ドルで貸し出し、一定の期間内に13香港ドルにして返させる意味である。利息は $(13-9)/9=44.4\%$ である。また、「一定の期間」は一般的に四半期の意味を指し、九出十三帰の年利は $44.4\% \times 0.25=11.1\%$ という「高利貸しの利率」になる。

21) マカオのカジノのVIPルームでは、基本バカラテーブルしか設置されていない。バカラというカジノゲームのルール紹介は大川・佐伯 [2011: 55] を参照されたい。

ができる。

表1で示したように、扒仔絡みの一般ギャンブラーへの高利貸しに関する事件が近年だけでも非常に多発している。ここで挙げたのは抽成数の控除率が明記された記事のみであり、控除率が明記されていない記事が他にもまだ大量に存在している。また、上記のパターン以外に、昔は「勝ち負けと関係なくベット一回ごとに固定の比率を控除する」や、「バカラの点数と関係なく、勝った場合10%と負けた場合5%を控除する」、「一定数勝ったら控除する」²²⁾などの計算方法も見られたが、この三つの方法より表1で取り上げた方法のほうが「儲けが良い」とされるので、最近の高利貸し組織はこれらの方法を取ることが多くなっている。

「儲けが良い」理由として、近年採用されなくなった三つの方法はいずれも「安定した確実な控除」に対して、表1で挙げた手段は「ギャンブル結果によって変動する控除」という特徴を持っている。言い換えると、高利貸し組織でもギャンブラーと同様に、安定性／確実性より「ギャンブルについてのギャンブル」という二重の意味のギャンブルに見られる「ギャンブル性」を好んで、より高い利息を狙う傾向にあると見受けられる。

また、指定のVIPルームのデッドチップを借りた一般ギャンブラーは、指定のVIPルームでしか賭けられない。扒仔（正確に言えば背後の組織）はジャンケットと同様、VIPルームでの一般ギャンブラーの賭け金総額によってリベートが生じる。しかし、扒仔から金を借りた一般ギャンブラーが机下のギャンブル²³⁾を行うことはほぼない。扒仔の間では、抽成数が机下のギャンブルのない低いリベートしかない代わりに、ギャンブラーを苦しめるために発案されたものであると言われているが、抽成数の起源は不明である。

さらに、抽底息と抽成数、リベートが一般ギャンブラーへの高利貸しから発生する収益であるが、すべて扒仔の懐に入るわけではない。各組織によって扒仔への配分が異なるが、2019年にマカオ警察が崩壊させた一つの高利貸し組織の例をあげると、扒仔は「利息（底息と成数の合計）」から30%の報酬がもらえるとのことである〔澳門日報 2019k〕。扒仔は貸付金をすべてうまく回収できれば、相当な高収入が得られる。

2 高利貸しを負わせるプロセス

本節では、扒仔による高利貸しのプロセスである「目標接近・借金協議・債権回収」を紹介する。マカオのカジノによく出入りする常連客、特にマカオのカジノに比較的詳しい広東語話者（広東人・香港人・マカオ人）の中老年層の男性ギャンブラーは扒仔の存在とそのや

22) 例えば、2万香港ドル勝つごとに3000香港ドルを控除するやり方も見られる〔澳門日報 2019m〕。

23) 机下のギャンブル (under-the-table betting) とは、テーブルリミットを超える手段として、テーブル上のゲーム結果を基準に場外に3倍から10倍まで同時に行われるギャンブルのことである〔Lo and Kwok 2017; 劉 2022〕。

り方を一部知っている。そのため、扒仔が狙いやすい目標となる対象は、カジノに詳しくないギャンブルで負けた観光客（特に団体旅行）のように見える標準語話者のギャンブラーと、若者のギャンブラーである。このような狙われやすい一般ギャンブラーは大半が有名な大型カジノに訪れるため、マカオ地元民であふれる「住民型カジノ」のような小型カジノでは、扒仔の存在がかえって非常に目立ち、扒仔はほぼいないと言ってもよい。

扒仔がよく狙う目標は、数枚のチップしか持っておらずギャンブルで負けたように見える1人であるギャンブラーである。特に、近年中国大陸で急速な経済発展が進んで香港の経済発展が比較的鈍化する中、扒仔が狙う対象は広東語話者以外の大陸人ギャンブラーという傾向になりつつあると言われる。若者のギャンブラーのように見える筆者は調査当初ある有名大型カジノにいた時、扒仔のような人に声をかけられた体験は上記の傾向をよく表している。

【事例 I】 扒仔？との対面 [2019年2月12日]

夜10時頃、筆者はある有名大型カジノにおいて100香港ドルのチップをわずか4枚手に握りながら、フロア内でうろろろしていた。テーブルからやや離れたところで手のひらを開いてチップを数えてキャッシャーで換金しようとした時、突然筆者と同じく20代のように見える男性が寄ってきて、「(標準語) 手伝おうか？」と声をかけてきた。状況がわからない筆者は率直に「(標準語) 何を？」と返した。その時喉が渴いていた筆者はウェイターが通りかかるのを見かけ、「(広東語) ミルクティーをください」とお願いした。「少々お待ちを」とウェイターがドリンクバーに取りに行ったが、広東語で注文した筆者を見て、先の若者は急に舌打ちをしてどこかへ消えた。

後にその男性の正体が扒仔かもしれないと知った筆者は、扒仔の話術に誘導されて高利貸しのトラップに飛び込む可能性があった。後日、小型カジノで地元民のギャンブラーたちにこの体験を話した際に、ほとんどの人はその男性が扒仔に違いないと断定した。地元民ギャンブラーから「扒仔の話に乗ったら大半危険な目に遭うから、もし扒仔のように見える人に声をかけられたら、無視するか、または直ちに広東語で『私、マカオ人なんで(手伝いは)要らないです』ときっぱりと断った方がいい」と教えられた。そして、扒仔を無視したり断ったりしてもしつこくついてくる場合は、天井にある監視カメラに視線を投げるといふ動作を繰り返せばいい、という扒仔の「撃退法」を教わった [2019年4月25日]。

一般ギャンブラーが扒仔の「手伝おうか」に応じると、目標接近のステップを終えた扒仔はすぐ次の段階である借金協議に入り、高利貸しへの誘導を始める。誘導の方法は後述するが、ここではまず高利貸しの借金協議と債権回収について紹介する。扒仔が所属する高利貸し組織は一般ギャンブラーに借金を貸す前に、一般ギャンブラーの資産状況を調べる。しか

し、VIP 客に対して数十万、数百万香港ドルのゲーミング・クレジットとは異なり、大抵数万、十数万香港ドルぐらいしか借りない一般ギャンブラーに対して徹底的な下調べは行われない。口座残高や身分証明書、運転免許証などの証明書類の提示を要求し、勤務先などを簡単に調べた後で借用書を作成し、ギャンブラーの港澳通行証またはパスポートを担保物として押さえ、そのギャンブラーに見合った金額を貸す。

一般ギャンブラーは観光客としてマカオを訪れることが多いため、所定の期間内に返済できない場合、通行証明書を押さえられた一般ギャンブラーは滞在期間を過ぎても大陸に戻ることができない。だが、一般ギャンブラーがマカオの警察に通行証の不法押収を通報することによって、扒仔が捕まる新聞記事がしばしば見受けられる。換言すれば、借金をつくったギャンブラーは法的責任を負うことなく無事に大陸まで帰ることができるが、金を貸した高利貸し組織の者、特に「監禁組」（後述）である扒仔たちは、高利貸しと不法押収罪によって法的処罰を受けることになる。

次に、債権回収について紹介する。高い利息がついているのみならず、VIP ルームでの高額なギャンブルに往々にして負けた一般ギャンブラーは、借りた分をその場で返済できる可能性は非常に低い。借金の返済ができないと言い張る一般ギャンブラーに対して、扒仔とその高利貸し組織が採用する方法は「釘倉（監禁）」である。債権回収では、扒仔は自ら監禁を行うことが多い。監禁場所はVIP ルームから近いホテルの客室が多く、これは、負債を抱えた一般ギャンブラーをカジノから離れた住宅地へ連れ込むのは目立つためである。監禁中は、殴打といった暴力や全裸写真の撮影などで脅迫することが多いと見られる。

表1で挙げた近年の扒仔に関する新聞記事においても大半が、借金をした一般ギャンブラーが借金を全てギャンブルで使い果たして返済することができず、監禁されているのがばれて扒仔が警察に捕まったと報じるものである。その中でも、負債を抱えた一般ギャンブラーが客室に監禁されたが、客室を出入りすることができたのみならず、自由に電話をかけることも可能であったため、債務者からの電話を受けた債務者の妻が警察に通報し、監禁を行った2人の扒仔が捕まったという「初心者の扒仔」事件が2021年でもまだ起きている〔澳門日報2021c〕。

また、扒仔とその高利貸し組織は警察側に内通者を用意する、という根回し対策も行っている。その利点は、「目標接近・借金協議・債権回収」のプロセスにおいて、高利貸しの証拠となる借用の書面が作成される借金協議と、監禁と暴力の債権回収が犯罪行為に当たるが、一般ギャンブラーへのアプローチである扒仔の目標接近は、第三者から見れば「単なる声かけ」に過ぎない。目標接近の際には扒仔の発言に高利貸しの内容が含まれず、録音されても立証が難しく、目標接近の段階で扒仔が逮捕されることはない。万が一、扒仔が一般ギャンブラーにしつこく話しかけてカジノの営業妨害容疑で通報されても、内通者によってうやむやにさ

れることが多いと言われる。

このように、扒仔が関わる高利貸しのプロセスについて簡単に紹介した。扒仔の高利貸しの特徴として、借金協議の際に担保を押さえることと、借金を取り立てる手段として監禁が多用されていることが挙げられる。次は、扒仔がジャンケットと最も異なる点であるアプローチ対象への目標接近において、金持ちギャンブラーである官僚や資本家への接触を図って信頼関係を築くジャンケットに対して、一般ギャンブラーを高利貸しまで誘導する際に扒仔が様々な者になりきる「変身」について紹介する。

IV 扒仔の実践と語り

1 変身によるターゲットへの接近

最初に、変身の必要性について簡単に述べる。カジノフロアで賭ける一般ギャンブラーは常連か初心者問わず、少なからず高利貸しの存在やその危険性を耳にしている。高利貸しへの警戒心が備わっている一般ギャンブラーに対して、たとえ当の一般ギャンブラーが大負けしたとしても思慮なしに高利貸しへ踏み入れさせることは容易ではないため、高利貸しの話をはじめから持ち出すのではなく、変身してギャンブラーに接近する必要がある。変身先は主に、(1)『『親切な』ギャンブラー・ジャンケット』、(2) VIP ルームのホスト、(3) 売春婦という三つに分かれる。以下、それぞれの変身方法について説明する。

まず、(1)『『親切な』ギャンブラー・ジャンケット』への変身について述べる。「親切な」ギャンブラーは、様々なレベルの「親切さ」に分かれている。最もわかりやすい基本的な「親切さ」は、【事例 I】で筆者が遭遇した単刀直入の「手伝おうか」というやり方である。カジノに慣れている一般ギャンブラーにとって、単刀直入の「手伝おうか」は聞いた瞬間に高利貸しを匂わせる声かけだとわかり、この声かけに乗る人はカジノに慣れていない初心者のギャンブラーのみであると言われている。

「手伝おうか」のほかには、ギャンブル結果の予想を助言する「助言型」が多いとされている。特に扒仔の間では、1人で賭けているギャンブラーが最も狙いやすいと言われている。扒仔はターゲットの一般ギャンブラーを決めると、その人の側に近づいて次のギャンブルの予想について聞く。単純にギャンブル好きのギャンブラー同士と勘違いするターゲットの一般ギャンブラーが予想を言った後、扒仔は自分なりに予想を言う。予想が一致する場合、「親密さ」を示すために扒仔から共に賭けるようターゲットに誘いかける。数回のギャンブルを通じて親密性を深めたと感じさせた上で、ターゲットが負けた場合、扒仔は一発逆転できる資金が提供可能であると言出し、高利貸しに持ち込む。

逆に、ターゲットがそれなりに勝った場合、扒仔はジャンケットに変身する。扒仔はさま

ざまな魅力的な理由を挙げ、VIP ルームへ行くことを強く勧める。ターゲットがそれに応じると、扒仔はターゲットをVIP ルームまで連れ込む。VIP ルームでターゲットが負ければ、上記のように同じく高利貸しの話を持ち出す。最初からターゲットにVIP ルームへ誘導するより、扒仔が「親切な」ギャンブラーの次にジャンケットに変身するという「二段階変身」のほうが、よりターゲットの警戒心を緩めることができ、高利貸しまで誘導する成功率が高いとされている。

次に、(2) VIP ルームのホストへの変身について説明する。扒女がホステスに変身するのではなく、扒仔がホストに変身することが多い理由は、ホステスの制服がカジノまたはVIP ルームによって色合いがかなり異なり、それを偽ることは難しいが、ホストは似たようなスーツ姿のため、細かく見ないと区別がつかないからである。VIP ルームのホストを装った扒仔は、小型カジノにいと直ちにディーラーや本物のホステスにばれてしまい、通報されるか追い出されることが多い上に、ターゲットが極めて少ないので、小型カジノには忍び込まない。一方、大型カジノでもカジノスタッフがすぐにホストを装う扒仔を見破るが、裏で高利貸し組織と利害関係を持っているとされるため、見て見ぬ振りをすることもある。

スーツ姿をした扒仔はVIP ルームのホストを装い、フロアで少し高額のベットをしたギャンブラーに近づき、自身の「所属する」VIP ルームへ行くよう強く勧める。ジャンケットへの変身と同じく、突然VIP ルームまで案内すると怪しまれるため、VIP ルームのホストに変身する扒仔はターゲットから個人情報を聞き出し、通行証や身分証明書のコピーで「所属する」VIP ルーム専用の「偽の会員カード」を作成する。高額のゲーミング・クレジットではなく、借書付きの低額の「偽の会員カード」を作成してしまったターゲットは、扒仔が貸すデッドチップのスパイラルから逃れられなくなる。VIP ルームで勝ったとしても一般のチップがもらえず、扒仔の話術により現金の回収が阻まれ、全部負けるまで永遠に引き延ばされる。

VIP ルームのホストに変身するという手口は、マカオのカジノに詳しくない初心者だが、比較的高額なベットをする、一般ギャンブラー以上金持ちギャンブラー以下の人に対して極めて有効である。フロアでは高額になるが、VIP ルームでは少額と見なされる賭け金でギャンブルする「一般ギャンブラーの上位層」の人は、自身がVIP ルームに入れる水準に達していないと思いついでいる。したがって、VIP ルームでのギャンブル実践を「地位の顕示」であると思っている「一般ギャンブラーの上位層」の人はVIP ルームの勧誘に乗りやすいとされている。

最後に、(3) 売春婦への変身について説明する。カジノ、ギャンブル実践と関係する売春婦の詳細は別稿 [劉 2021a] を参照されたいが、ここで述べるのは「本物の売春婦」ではない。扒仔がジャンケット、VIP ルームのホストを装うのに対して、扒女の多くが売春婦を装う。扒女のやり方は主に、少額のチップを持ってフロア内をうろつき、特に連れ合いのいな

い中高年層の男性ギャンブラーをターゲットにして近づいていく。ターゲットをロックオンすると、ホステスのように側で付き添って数回のギャンブルをする。良いタイミングを見計らってターゲットが疲れたように見える時、「1人でマカオに来てホテルに泊まっているけど、ちょっと私の部屋で休憩しない？」といった性的暗示を含めた誘いの言葉を発して美人局を仕掛ける。

ターゲットがそれに応じれば、扒女はターゲットをホテルの客室まで案内するふりをして、ホテル内の別のところにあるVIPルームまで連れ込む。不意にVIPルームを通りかかってVIPルームの雰囲気こそそられたかのように見せかけて、入室してみたいとターゲットを唆す。勤が利く一般ギャンブラーはそれを断って帰ることもできるが、扒女の性的誘惑に吞まれて甘言に乗ってそのままVIPルームで高額のギャンブルを始めるターゲットもいる。

このように、扒仔はジャンケット、VIPルームのホスト、扒女は売春婦などへの変身を通じて、匿名性が高く一時的な親密性を築きやすいフロアの特徴を利用し、マカオのカジノの内実に詳しくない一般ギャンブラーをターゲットとして接近して高利貸しへ誘導を試みる。どちらの変身も高利貸しすることを最終目的としているが、実際、多くの扒仔は変身せずに最も手っ取り早い「手伝おうか」と声を掛ける方法を取る。

しかしながら、テクニックのある扒仔は変身を採用する理由として、ターゲットを誘導する成功率を上げるためのみならず、捕まらないためでもあるという。扒仔はフロアにおいてどのような手段でターゲットを口説いても、高利貸しの借用書をその場で作成しない限り、決定的な逮捕の証拠が存在しない「ただのギャンブラー」に過ぎない。そのため、扒仔はフロア内における私服警官の存在を見極めなくても、ある程度自由にフロアを歩き回ることができる。

2 扒仔の循環的再生産

次に、扒仔と共に実際に行動する場面の記述の代わりに、公開可能な範囲内で3人の扒仔(HWとJW, ST)の語りを紹介し、マカオのカジノで暗躍する扒仔の生について考察する。とりわけ、扒仔と病的ギャンブラーの間の「循環的再生産」の側面に注目する。

HMとJW(20代男性, 30代女性)

HMとJWはある高利貸し組織に所属している扒仔と扒女である。HMは新入りの扒仔だが、JWは扒女の経歴をある程度持っているようである。2020年1月9日夜、2人とある大型リゾートの外で少しだけ話を聞く約束をしたが、筆者が到着した時、2人は反省会を開いているようであった。

「お前、ひとつも成果を挙げてねえじゃん。新人とはいえ、そこまで待てないわ」とJWは

HMに怒っていたが、HMは筆者の方に視線を投げ、筆者の到着をJWに知らせた。「ああ、いいよ別に。お前恥づかしいか？どうせ今から話すし、知られても困る話じゃないわ。それよりお前はこのままだったら永遠に（組織から）抜けられないぞ」とJWはくだけた感じでHMに返した。

2人と会話を20分間ほど交わしたが、まとめると以下のような内容である。HMは2ヶ月前にギャンブルで所持金を全て失いフロアをうろろうしていた時、現在所属する高利貸し組織の扒仔に声をかけられ、これまでの負けは単なる不運でこれから負けた分を取り返そうと思って扒仔の話に乗ってしまった。HMは3万香港ドルを借りてVIPルームで賭けたが、それもあっさり全て負けてしまい、3万どころか利息付きで10万香港ドルの借金になってしまった。港澳通行証を担保として押さえられたHMは大陸に帰れず、借金を返済するためにそのまま高利貸し組織に入って扒仔の新たな一員になった。

しかし、HMは組織に入って2ヶ月も経ったにも関わらず、1人のターゲットも見つけられず、ターゲットが声かけに応じてきても、その人をVIPルームまで連れ込むことがなかなかできない。言い換えると、HMは組織に入って以来いまだに「営業高」がゼロであり、活動中はJWのような「先輩」に見張られることになった。

また、JWもHMと同じように、高利貸しの借金を返済できないため現在の高利貸し組織に入ったようである。「なんとかお前なりのターゲットを騙す方法を考えろ。私だって体を売っているから」とHMに言った一言から、売春婦を装うことが恐らくJWのやり方である。他に、「しょっちゅうターゲットを連れてくると聞いていますし、借金は全部返済しましたか？返済したならどうしてまだこのグループにいるのですか？」とHMはJWに聞いたが、「そんなの、聞かなくてもわかるだろ。お前もそうじゃないか。ギャンブルの衝動がどうしても抑えられないしょうもないギャンブラーこそ扒仔になるのよ。何回も組織から抜けられたけど、結局また負けまくって戻ってきた」とJWは特に気にすることなく言った。

会話の最後に、JWは「もしこのまま誰も連れてくることができないなら、お前を釘倉組（監禁を担当するグループ）²⁴⁾に移すわよ。わかった？」とHMに警告した。ターゲットに接近するだけなら警察に捕まる心配はほぼないが、監禁を実行すると逮捕される確率が格段に高まるため、監禁組という言葉聞いたHMは一瞬顔が青ざめた。

扒仔は人目を避けるために、フロア内で扒仔同士の交流はほぼ見られない。代わりに、有名なカジノの外（フロアではなく建物の外）で扒仔の群れがよく見かけられる。HMとJWの会話から、2人の扒仔になった理由や組織から抜けられない理由、高利貸し組織内部の役

24) 釘倉組（広東語発音：デェンツォンゾウ）とは、高利貸し組織において債務者の監禁の実行役と監視役である。「営業」に出ない代わりに、一日数百香港ドルの「監禁・監視の手当」が支給されるという。

割分担などを垣間見ることができる。HMとJWは、もともと一般ギャンブラーとしてマカオのカジノで賭けていたが、負けた分を取り返したい思い出他の扒仔に唆されて高利貸しの借金を作ることに至った。さらにVIPルームでのギャンブルでも負けてその借金を返済できない場合、債務者は返済不能な分を高利貸し組織が立て替える代わりに、その組織に入る羽目になる。組織に入ると、今度は他の一般ギャンブラーにおける潜在的な病的ギャンブラーをターゲットとして口説く側になる。これが、扒仔と病的ギャンブラーの間の「循環的再生産」の一つ目の現れである。

仮に扒仔として多額の「営業高」を上げて報酬を得ても、もともとギャンブル嗜癖を持つ扒仔は借金返済後、組織から抜けて一般ギャンブラーに戻っても直ちにまた借金をつくることが多いと言われている。とりわけ、多くの高利貸し組織から借金の借り先を選ぶ場合、扒仔は前にいたことのある「慣れた」組織から再度借りることを選びがちである。一旦組織から抜けた扒仔は大半が一般ギャンブラーとして長くいられず、再び借金まみれの生活に戻ってしまうことは、「循環的再生産」の二つ目の現れである。他にも、「循環的再生産」の例として、JWの紹介で知り合った扒仔のSTの事例を紹介する。

ST (30代男性)

STはHMとJWと同じ高利貸し集団に所属している江西省出身の扒仔である。STは常に各カジノ間を行き来しており、なかなか会うことができなかったが、2020年2月上旬マカオのカジノが新型コロナウイルスの感染拡大防止のため2週間営業中止(2月5日～2月19日)という極めて稀な事態の中で、「営業」の停止を余儀なくされたSTに話を聞くことができた。

STは他の扒仔と同じように借金が完済できないため、高利貸し集団に入った。JWの話によると、STは彼女より前に組織に入った先輩で、「営業高」が組織内では良い方の方である。STは朗らかで話しやすい印象を受けるが、汚い言葉を連発していた。STの手口は他の扒仔と大して変わらないが、陥れやすい同郷のギャンブラーを見つけて巧みに勝たせるという。

同じ訛りの人に話しかけられたら、警戒心を解いて親近感が湧く人が多いんだよ。もちろん相手にされないこともよくあるけど、そんなことで諦めたら食っていけない。騙しやすそうなやつを見つけたら、マークしていた流れの良いテーブルへ案内して一緒に賭けて勝たせてやればいい。そしたら話に乗ってくれるようになる。特にカジノに詳しくなさそうなやつを見つけて、バカラの罫線の法則²⁵⁾を適当に言えば鵜呑みにしてくれ

25) 罫線とは、バカラの出目を記録する表のようなものである。あるひとつの罫線に対してギャンブラーによって見解や予想が異なることもよくある。罫線の詳しい説明について、筆者の別稿を参照されたい [劉 2021b: 80]。

るさ。

必ずしも勝てるわけではないって？それはそうだよ。必勝法なんてあったらカジノがやっていけないだろう。そんなのを信じて騙される方がバカだ。負けた時はターゲットからしらけた顔で潔く去ればいい。相当に絡まれない限り、大勢のギャンブラーがうじゃうじゃいるカジノフロアでは、警備員に目をつけられない [2020年2月17日]。

ただ、JWと異なる点として、現在の組織に入る前に別の組織でも扒仔としてやっていたようである。

いくつの組織にいたかは教えられないけれども、組織の間で違うところはそんなになると思う。やることはワンパターンで、扒仔の報酬の構成が違うだけかな。あと、縄張りには存在するけれども、詳細は話せないね。なんでいくつも違う組織にいたのかということ、それはギャンブルの勝ち負けの繰り返しに過ぎないね。ただ、今の組織にはけっこう長い間いる [2020年2月17日]。

STは上記の内容を話してくれた後、さらに苦笑いしながら経歴を通して自身のどうしようもないギャンブルの嗜癖について補足した。

俺、高校にも行けなかったから、ずっと地元の工場で月1800元のライン作業をしていた。仕事は退屈だし、休みの日に友達とトランプゲームで賭けることくらいが生きがいであった。数年前、ある機会を知り合いと一緒にマカオに遊びに来たけれども、当時賭ける金なんてほぼなかった俺はテーブルゲームではなく、ミニマムベットが10香港ドルのマシンパカラをやってみた。

すると、ビギナーズラックかどうか知らないけれども、100香港ドルしか入れなかったのに、見る見るうちに2000香港ドルまで勝ってしまって、「こんなに簡単に1ヶ月の給料ぐらいの金が手に入るのか」という考えが頭から離れなかった。

その後も勝ち続けて酔いしれた気分で江西に帰ったけれども、生産ラインにいる時に頭の中ではどうしてもカジノのことが忘れられなくて、仕事で何回もミスをしてしまってクビになった。ならいっそのこと、プロギャンブラーみたいにギャンブルで金をゲットすればいいだろう、と思ってマカオに再び来てしまった。

一回目ほど勝ちまくったわけではないけれども、マシンではなくてテーブルに挑戦してみた。他のギャンブラーと一緒に賭ける時に非常にいい気分になって、賭け金もどんどん大きくなってしまって、工場生活にはもう戻れないと思った。ある時、うっかり大

負けしたけれども、俺なら取り戻せると思って、つい扒仔の声かけに応じてしまった。でもその時借りた金で巻き返せなくて、否応なしに扒仔生活を始めた〈中略〉。

扒仔になって何度も借金と返済の繰り返しをするうちに、気づいたらもうギャンブルがやめられない体質になっていた。ターゲットの債権をうまく回収できれば、扒仔でも工場生産員より何倍も収入が得られるが、結局全部カジノにつき込んでしまう！でも、まったく後悔していない。扒仔の生活は、むしろ俺に合う。たぶん俺、賭けないと死んでしまうから！衝動が抑えられなくて、まるで薬物みたいだ。今でも、カジノが10日間くらい開いていないから、うずうずしてしょうがない [2020年2月17日]。

上記の語りから、STは典型的な「重度の病的ギャンブラー」と言える。もともとギャンブル好きのSTは、工場労働という低賃金で単調な仕事内容の反動で、マカオのカジノに一回訪れただけで夢中になってしまう。勝ち続けたSTは一回の大負けで自身の能力を過信し、高利貸しに手を出してしまった。

借金を完済できなかったSTは扒仔の生活を送ってきたが、HMのように嫌がるのではなく、かえって楽しんでいるように見える。とりわけ、STは自身のギャンブルの嗜癖および高利貸し集団の加入と脱退の繰り返しを、JWのように否定的に考えておらず、むしろ扒仔の生活をギャンブルと生の不確実性を享受するものとして捉えている。ギャンブルと扒仔の生の根底に共通する不確実性は、STが身を削ってまで楽しむものであり、扒仔の身分をやめられない「循環的再生産」の本質でもある【図1】。

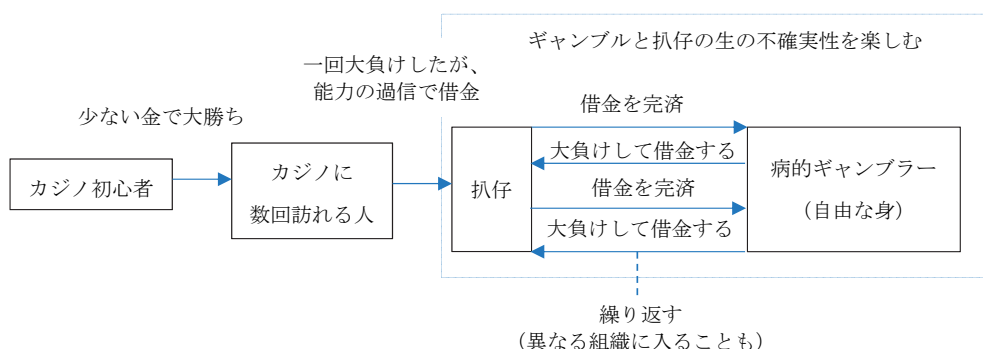


図1 STのギャンブルと扒仔の経歴に見られる「循環的再生産」の生成プロセス

出典：筆者作成

また、元ジャンケットのWXは、以前ジャンケットをしていた際に一部の高利貸し組織の扒仔との間で協力と交友関係があったため、扒仔に比較的詳しいと言った。WXは、扒仔と

病的ギャンブラーの間の「循環的再生産」について以下のように補足した。

扒仔は大半がジャンケットと同じ、いやそれ以上に救いようがない病的ギャンブラーなんだよ。俺の知っている扒仔は全員、もともと借金を返せないギャンブラーだった。こんな汚い仕事を自らやる人なんていない。人のことを言えないけれども、監禁なんかよくやるもんだから、少なくともジャンケットよりは汚い。

借金をうまく回収できれば、扒仔だってジャンケットに劣らないくらい、まあまあの報酬がもらえるけれども、報酬をもらったとしてもさっぱりきれいに高利貸しから抜けられるわけではない。すぐギャンブルに駆けつけて負けて、また借りてしまう。この繰り返しの中で扒仔はどんどん他の病的ギャンブラーに半ば拉致のようなことをして、結局扒仔の数はどんどん増えてしまう [2020年7月10日]。

ここで筆者は、扒仔が組織の仕返しを恐れて抜けられないのではないかと WX に聞いたが、彼は以下のように答えた。

いやいや、組織から抜けたら仕返しを受けるなんて、俺の知っている限りマフィア絡みの高利貸し組織でもそのようなことはしない。ははっ、マフィアを題材にした映画の影響が強いからそういうイメージを持っているのか？ 実際、下っ端の奴が自分の借金を返済できたら、そいつが身を引いても上の人は誰も気にしないんだよ。扒仔がやめると言い出しても、どうせそのうち戻ってくるから組織の人は誰も引き止めないらしい。結局、扒仔をやめることは、ギャンブルをやめることなんだな [2020年7月10日]。

このように「循環的再生産」の正体は、扒仔とギャンブルの間における切っても切れない関係にある。大半の扒仔はもともと一般ギャンブラーだったが、ギャンブルに身をさらす快感に魅了されて、その快感を断ち切ることができず高利貸しに手を出してしまう。この点、扒仔は「正真正銘の病的ギャンブラー」である。そもそも「理性的」なギャンブラーは所持金を全て失っても、高利貸しから借りる発想がなく高利貸しの勧誘が近づいてきても拒否する。

そして、一旦他の扒仔の高利貸しの勧誘に応じてしまったギャンブラーは自身の能力を過信し、とてつもなく高い控除率を持つ抽成数のもとでも、来るギャンブルで連勝して今まで負けた分を取り返せると思っている。しかし実際、高利貸しに手を出す前ですら勝てなかったギャンブラーが、高利貸しによるそれ以上に不利な条件を負う中で、巨額の勝利を叩き出すことは到底できない。現に、極稀に連勝して借金を負うことなく大陸まで帰った人は、「奇

跡」と呼ばれるほどである。借金の返済不能という理由で、一般ギャンブラーにおける病的ギャンブラーが強引に新たな扒仔にさせられる。

新しく扒仔になった人は自身が高利貸しに勧誘されたように、今度は自身が声をかける側に回る。ギャンブラーのギャンブル嗜好を熟知している扒仔は自身の経験を生かして、新たに「高利貸しの勧誘」という不確実性に身をさらすことになる。しかしこの「扒仔の生の不確実性」には、脅迫や威嚇を伴う高圧的な行為が含まれるだけではなく、逮捕される危険性に常にさらされている。ギャンブルの不確実性とは別系統にある扒仔の生の不確実性への対処は、当の扒仔の態度によって大きく二つに分かれる。一つ目はHMのように、扒仔の生の不確実性を嫌い、組織の脱退を目標とする人である。二つ目はJWとSTのように、扒仔の生の不確実性をギャンブルの不確実性と同様に「楽しみ」、組織から脱退する条件を満たして一時的脱退を経ても、また戻ってきてしまう人である。

こうして、ギャンブル嗜癖から脱却できない扒仔は、絶え間なく次の扒仔を増やすと同時に、自分自身も借金と犯罪集団の絡み合いから抜け出せないという、「循環的再生産」をする。扒仔は「循環的再生産」において、借金の取り立てにおける監禁のように、ギャンブル自体の不確実性に身を過度にさらした結果、自身の身も監禁されていると言えよう【図2】。ただ、この監禁はギャンブルをやめられない扒仔にとって否定的意味が含まれるというより、ギャ

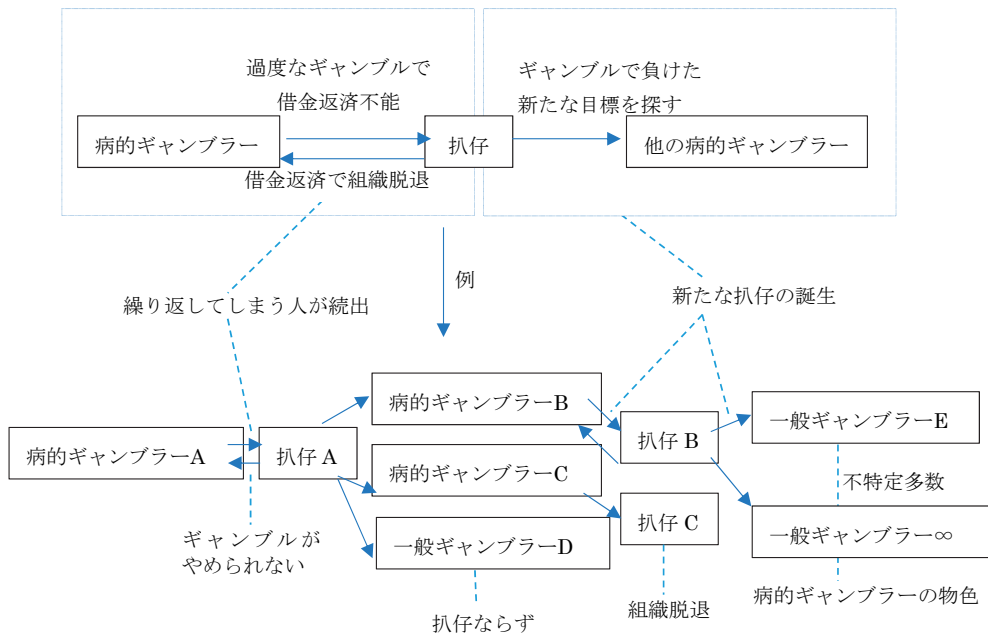


図2 病的ギャンブラーと扒仔の間における「循環的再生産」のプロセス
出典：筆者作成

ンブルと生の不確実性を楽しむものとして捉えられているだろう。扒仔とギャンブルの関係性を表す「循環的再生産」は、マカオの扒仔という犯罪者が生まれ続ける本質であると言える。

V おわりに

このように扒仔はもともと病的ギャンブラーであるが、様々な変身の技法を用いて他の病的ギャンブラーを誘導することにより、新たな扒仔を誕生させるのみならず、自分自身もギャンブルの嗜癖を理由に組織の加入と脱退を繰り返す、という「循環的再生産」のスパイラルが見受けられる。扒仔は時として病的ギャンブラーとしてフロアで賭けたり、またはジャンケット、VIP ルームのホスト、売春婦を偽装したりすることから、定義しがたい存在である。実際、扒仔をローンネゴシエーターとして本稿冒頭で定義づけたが、債務者の監禁を実行するだけの扒仔も存在する。このように変幻自在の扒仔は、マカオのカジノのVIP ルームシステムと高利貸し組織に詳しくない人から見れば、得体の知れない存在に見えるであろう。まして本稿の冒頭で紹介した扒仔に関する唯一の先行研究 [Chan and Ohtsuka 2013] のように、扒仔をカジノでの病的ギャンブラーの様子から説明するのはあながち間違いではないが、実際、扒仔は病的ギャンブラーの部分集合に過ぎず、同義扱いするのは実態と異なる。

扒仔は一般ギャンブラーにとって、常に危険な存在であるに違いない。また、マカオのカジノのVIP ルームの発展を担う役割とされるジャンケットとは異なり、扒仔はマカオ社会において高利貸しの代名詞であり、警察や一般市民からすれば売春婦と同様に排除すべき違法な存在である²⁶⁾。ただ、扒仔のような犯罪者が法制度の完備と取締活動の強化によって完全に消え去る存在ではない以上、この犯罪のマカオ社会における社会的・文化的文脈と犯罪者の生き抜く技法を考察する必要がある。

扒仔による犯罪行為が生まれる社会的・文化的文脈にあたる制度的理由（一国二制度および紹介制VIP ルーム）と文化的背景（テーブルゲームの人気や能力の過信など）はすでにII章で紹介したため、ここでは繰り返さないが、本稿で取り上げた扒仔の生と語りを通して、変幻自在の彼らの正体とマカオ社会で生き抜く技法はギャンブルと負債に強く関わっている病的ギャンブラーであることがわかった。具体的には、(1) ギャンブルを通して他のギャンブラーと一時的な親密性を築くことによって負債を負わせる手法を用いる実践、(2) ギャンブル嗜癖から抜けられない扒仔自身が新たな借金を作ってしまうというギャンブルの負債に精神的・金銭的に縛られる状態、という二つの意味が含まれる。ただ、ギャンブルの負債を

26) 実際、近年（コロナ禍前）マカオ警察によるカジノに対する定期的な巡査において、扒仔は両替商、売春婦と同様に重点的に逮捕する対象となっている [e.g. 澳門日報 2019j; 2020b]。

ひたすら否定的に捉えるのではなく、むしろその負債に縛られることが転じて、ギャンブルと生の不確実性を楽しむ扒仔も見受けられる。

このように、大きな社会的・文化的な文脈だけでは見づらい扒仔の生におけるギャンブルと負債の関係性は、彼らの実践と語りを記述することを通して浮かび上がってくる。ある社会における特定の犯罪を理解する際に、犯罪が生成される文脈というマクロの視点はもちろん重要だが、犯罪者の実践と語りの記述を通して彼らの生を考察することも不可欠である。

本稿はマカオのカジノにおける扒仔の実態を解明するという目的で、扒仔または背後の犯罪集団の文化的側面ではなく、彼らの実践と語りを対象に考察を行った。そこに見られるのは、扒仔の犯罪行為が生成されるマカオの社会的・文化的文脈のみならず、扒仔がその文脈の中でギャンブラーとの間で生成しやすい一時的親密性を利用するという、カジノ社会において犯罪者として生き抜く技法も重要である。とりわけ、「循環的再生産」のスパイラルから抜け出せない扒仔がギャンブルと生の不確実性と戯れることこそ、扒仔という犯罪者がマカオのカジノで生成され続ける理由ではないだろうか。また、本稿はこれまで焦点が当てられてこなかった扒仔に対して犯罪人類学のアプローチを手がかりに考察を試みるものであり、扒仔の実践がもつ負債との深い関係性を負債論の観点から、ギャンブルと生の不確実性を楽しむ様子を不確実性の人類学の観点から議論を深化させることが今後の課題である。

謝 辞

本稿の執筆にあたり、現地調査ではインフォーマントの方々に多大なご協力をいただいた。また、匿名の査読者2名の先生から貴重なご意見とご指摘をいただいた。ここに記して感謝を申し上げたい。

参 考 文 献

[日本語文献]

大川潤・佐伯英隆

2011 『カジノの文化誌』 東京：中央公論新社。

古宮望美

2021 『カジノ導入に対する日本人の認知モデル探索に関する研究』 筑波大学大学院理工情報生命学術院提出博士論文。

斎藤環・都築響一・榎木野衣・増田聡・飯田豊・石岡良治・卯城竜太・櫛野展正・津口在五

2014 『ヤンキー人類学——突破者たちの「アート」と表現』 東京：フィルムアート社。

佐藤郁哉

1984 『暴走族のエスノグラフィー——モードの叛乱と文化の呪縛』東京：新曜社。
ラズ, ヤコブ

1996 『ヤクザの文化人類学——ウラから見た日本』高井宏子訳, 東京：岩波書店。

劉振業

2021a 「誘惑と厄祓いの身体——マカオのカジノの内外における『性的』女性をめぐる——」『年報人類学研究』12: 1-29.

2021b 「身体による共同的祝祭行為——マカオのバカラギャンブルにおける『しぼり』の実践を事例に——」『華南研究』7: 73-91.

2022 「信頼のギャンブル——マカオカジノのVIPルームにおけるジャンケットの事例から——」『白山人類学』25: 155-184.

[英語文献]

Caldeira, T. P. R.

2000 *City of Walls: Crime, Segregation, and Citizenship in São Paulo*, Berkeley: University California Press.

Chan, C. C. and K. Ohtsuka

2013 The Clinical and Social Construction of the Paichais of Macau, *Asian Journal of Gambling Issues and Public Health* 3(1): 1-11.

Chu, Y. K.

2000 *The Triads as Business*, London/New York: Routledge.

Comaroff, J. and J. L. Comaroff

1999 Occult Economies and the Violence of Abstraction: Notes from the South African Postcolony, *American Ethnologist* 26(2): 279-303.

Fleisher, M. L.

2000 Kuria Cattle Raiding: Capitalist Transformation, Commoditization, and Crime Formation Among an East African Agro-Pastoral People, *Comparative Studies in Society and History* 42(4): 745-769.

Gallant, T. W.

1999 Brigandage, Piracy, Capitalism, and State Formation: Transnational Crime from a Historical World-Systems Perspective, In *States and Illegal Practices*, edited by Heyman, J. Mc. C., pp. 25-63, Oxford: Berg Publishers.

Guha, R.

- 1983 *Elementary Aspects of Peasant Insurgency in Colonial India*, Delhi: Oxford University Press.
- Hobsbawm, E.
- 1959 *Primitive Rebels: Studies of Archaic Forms of Social Movement in the 19th and 20th Centuries*, Manchester, UK: Manchester University Press.
- Jensen, R. B.
- 2001 Criminal Anthropology and Anarchist Terrorism in Spain and Italy, *Mediterranean Historical Review* 16(2): 31-44.
- Jones, D. A.
- 1986 *History of Criminology: A Philosophical Perspective*, New York/Westport, CT: Greenwood.
- Kaplan D. E. and A. Dubro
- 2012 *Yakuza: Japan's Criminal Underworld*, Berkeley: University of California Press.
- Lam, D.
- 2005 Slot or Table? A Chinese Perspective, *UNLV Gaming Research & Review Journal* 9(2): 69-72.
- Lo, T. W. and S. I. Kwok
- 2017 Triad Organized Crime in Macau Casinos: Extra-legal Governance and Entrepreneurship, *The British Journal of Criminology* 57(3): 589-607.
- Low, S.
- 2001 The Edge and the Center: Gated Communities and the Discourse of Urban Fear, *American Anthropologist* 103(1): 45-58.
- Malinowski, B.
- 1926 *Crime and Custom in Savage Society*, London: Kegan Paul/Trench/Trubner.
- McMurray, D. A.
- 2003 Recognition of State Authority as a Cost of Involvement in Moroccan Border Crime, In *Crime's Power: Anthropologists and the Ethnography of Crime*, edited by Parnell, P. C. and S. C. Kane, pp. 125-145, New York: Palgrave Macmillan.
- Paoli, L.
- 2003 *Mafia Brotherhoods: Organized Crime, Italian Style*, Oxford, UK: Oxford University Press.
- Scheper-Hughes, N.
- 2000 The Global Traffic in Human Organs, *Current Anthropology* 41(2): 191-224.

Schneider, J. and P. Schneider

2008 The Anthropology of Crime and Criminalization, *Annual Review of Anthropology* 37: 351-373.

Schüll, N. D.

2013 Turning the Tables: The Global Gambling Industry's Crusade to Sell Slots in Macau, In *Qualitative Research in Gambling: Exploring the Production and Consumption of Risk*, edited by Cassidy, R., A. Pisac and C. Loussouarn, pp.92-106, New York: Routledge.

Siu Lam, C.

2013 Changes in the Junket Business in Macao after Gaming Liberalization, *International Gambling Studies* 13(3): 319-337.

Venkatesh, S. A.

1998 Gender and Outlaw Capitalism: A Historical Account of the Black Sisters United "Girl Gang", *Signs: Journal of Women in Culture and Society* 23(3): 683-709.

Vigil, J. D.

2003 Urban Violence and Street Gangs, *Annual Review of Anthropology* 32: 225-242.

Ziliotto, A.

2019 Cultural Expertise in Italian Criminal Justice: From Criminal Anthropology to Anthropological Expert Witnessing, *Laws* 8(2): 13.

[中国語文献]

澳門日報

2019a 「兩內地女借貴利賭光 遭掌摑禁錮拍內衣照」 2019年4月7日.

2019b 「司警搗內地扒仔貴利集團拘三人」 2019年4月21日.

2019c 「扮賭客借錢七男女趁亂呃貴利廿萬斷正」 2019年4月23日.

2019d 「台漢借貴利賭敗遭禁錮 警拘兩嫌」 2019年4月28日.

2019e 「趁轉場伺機劫走六十五萬 兩貴利落網一在逃」 2019年8月27日.

2019f 「內地女借貴利遭禁錮強姦 一男被捕三在逃」 2019年8月31日.

2019g 「又一單！內地女欠貴利遭剝衫險強姦警拘兩扒仔」 2019年9月4日.

2019h 「女商人遭貴利佬強脫拍裸照 警拘六男女」 2019年9月18日.

2019i 「放貴利伺機詐騙 三男被捕一男捲款潛逃」 2019年11月6日.

2019j 「【雷霆 2019】治安警截兩貴利一換錢黨三流鶯」 2019年11月24日.

2019k 「司警再搗跨境賭博貴利集團 拘八內地男女」 2019年11月27日.

- 2019l 「内地男輸光廿萬貴利遭禁錮 二人被捕」 2019年12月14日。
2019m 「賭客借十萬搏殺不適圖離場 貴利扣證送法辦」 2019年12月31日。
2020a 「【涉案兩億四】珠澳警方破貴利禁錮案拘七十六嫌」 2020年1月3日。
2020b 「【冬防2020】司警巡查路氹娛樂場截卅換錢黨扒仔」 2020年1月4日。
2020c 「三內地男輸清貴利數遭禁錮 警拘四人」 2020年1月18日。
2020d 「逾留內地漢自揭豪賭輸千萬遭禁錮 一貴利再入境被捕」 2020年3月19日。
2020e 「内地男輸光十萬貴利遭禁錮 兩被拘」 2020年3月28日。
2020f 「五旬的哥涉介紹借貴利被捕」 2020年4月9日。
2020g 「内地漢涉貴利禁錮被捕」 2020年9月10日。
2020h 「【借卅萬輸清】内地男無力還債報警一貴利被捕」 2020年9月19日。
2020i 「銷售男無業女輸光貴利報警 兩內地男被捕」 2020年10月8日。
2020j 「三內地男涉放貴利禁錮送檢院」 2020年10月10日。
2020k 「【車財兩失】内地女押車借貴利賭博被騙 警拘一人」 2020年10月20日。
2020l 「内地貴利佬涉禁錮債仔被捕」 2020年10月21日。
2020m 「内地男子涉高利貸被捕 三在逃」 2020年11月7日。
2020n 「内地女疑輸光貴利被禁錮 警拘一女」 2020年11月12日。
2020o 「兩內地男涉高利貸送檢院」 2020年11月28日。
2020p 「内地漢借貴利賭敗遭禁錮 老友擔保同受累」 2020年12月29日。
2021a 「兩內地貴利佬涉禁錮債仔被捕」 2021年2月4日。
2021b 「司警反罪惡揭貴利案 拘兩內地漢」 2021年2月9日。
2021c 「賭客輸廿萬遭兩“貴利佬”扣證終脫身」 2021年3月4日。
2021d 「内地男無力還債遭禁錮 警拘兩貴利」 2021年3月20日。
2021e 「借貴利卅萬賭敗 内地男遭禁錮棒毆背脊拍半裸片」 2021年4月1日。

[ウェブサイト]

澳門特別行政區政府博彩監察協調局 (DICJ)

2022 「2022年澳門幸運博彩娛樂場數目」 2022年9月20日アクセス。

<https://www.dicj.gov.mo/web/cn/information/DadosEstat/2022/conten.html#n5>

澳門特別行政區政府統計暨普查局 (DSEC)

2022 「2021年澳門總面積」 2022年9月20日アクセス。

<https://www.dsec.gov.mo/zh-MO/Statistic?id=2>

澳門保安司司長辦公室 (GSS)

2022 「最新罪案數字」 2022年9月20日アクセス。

<https://www.gss.gov.mo/cht/statistic.aspx>

澳門海關 (MCS)

2022「入境 / 出境申報」2022年9月20日アクセス.

<https://www.customs.gov.mo/cn/customs2.html>